



宗教と家族

— 教えの継承と多様性 —



第5回現代と親鸞
公開シンポジウム

大谷 由香

OTANI Yuka

(龍谷大学文学部特任准教授)



【登壇者からのメッセージ】

紀元前5世紀頃にインドで教えを開いた釈尊は、自身も家庭生活や家業から離れて修行に専念し、弟子たちにも同様に“出家”してさとりを目指すことを求めた。彼らの出家生活は在家信者に経済的に依存することで成立する。このため出家者には当時の一般常識に付合する規律が設けられ、その第一は性交渉の禁止であった。

翻って現代日本仏教では、僧侶が妻帯し、長男に寺院を継承させることが一般に行われている。これは明治5（1872）年4月の「僧侶の肉食妻帯勝手たるべし」の太政官符公布以来に顕著となったが、実際には奈良時代にはすでに僧侶の妻帯は行われていたし、鎌倉時代には一家全員が僧侶という家系も存在していたことがわかっている。親鸞もまたそうした家族を作った一人として有名である。

日本仏教にとって“家族”とはなんだったのか、またそのなかで性別役割分担はどのように行われたのか、これまでの研究成果を紹介しながら、いっしょに考えてみたい。

(おおたに・ゆか)